
茶室は本当はゆっくりするところです

岩戸 勇太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

茶室は本当はゆっくりするとこです

【Nコード】

N9733R

【作者名】

岩戸 勇太

【あらすじ】

シェールのシュヴァリエの劇中間の話。
一美が突然シェールを家に呼び出した。

「当一。シエール達をうちに連れてこないか？」

昼休みの時間、自分の机で購買のパンを食べていた当一に一美が言ってきた。

申し出じたいには異存はないだがなぜいきなりそんな事を言い出したのだろうか？ 当一は疑問に思ったので聞いてみた。

「そ……それは……」

言いよんだ一美は、何かを考えるようにして顔をそらした。頬がなぜか赤くなっているのに当一が気づいたが、さして気にもせずに一美の言葉の続きを待った。

「それは……あれだ。お前の友人というなら、私の友人だつていうのと同じだ……ちよつと一緒にお茶でも飲もうかつて思ったんだ……」

『こいつ……なんか裏があるな……』

一美は、嘘が『ど』が付くほど下手である。当一には一美の表情がこれ以上になく怪しく見えた。

今の一美の表情は、まるで何かを隠していますと言わんばかりに、目が泳いで頭を掻いていたのだ。

「何をするつもりだ？」

「べっ……別に何かをしようなんて思つてない！」

「……そうか……今度、みんなを連れて行くよ」

バレバレであるのだが、当一はあえてそう言った。

「上手く誘えたかしら？」

一美が隣の教室にいくと、紫色をした髪の子がいた。

切れ長であるが、いくぶんか柔らかい目元で、長い髪をした女の子である。

一美の事を待ちかまえていたようで、一美の事を見るとニコリと

笑って出迎えた。

「何の問題もない。まったく怪しまれてなかったぞ」

胸を張って言う一美。それを見ると、リーシアは逆に不安になった。

「普通に誘えばいいのよ……？」

隣同士の教室になったリーシアと一美は、よく会う事になった。

リーシアは一度、一美と好きな人との間を取り持つのに協力をしてほしいという約束をした。

一美の好きな人というのは、当一の事であるというのは、後になって知った事だが、リーシアはその事を守り、律儀に相談に乗っているという関係だ。

「それで、あなたの気が済むならいいのだけど……やり方が陰険すぎないかしら？」

リーシアが言うが、一美の耳には届いていない。

「見ているよ！ 格の違いというものを見せ付けてやる！」

一人で燃えている一美の姿があった。

「一美……こういうのはやりすぎちゃいけないわよ……」

一美の耳に届かないのを分かっているが、リーシアはとりあえず忠告をした。

「あらまあ。一美ちゃんの家にお呼ばれたのね」

家に帰り、当一が祥子に報告をする。

今いるのは全員が集まっているリビングだ。

黒髪の少女。ラタはソファーに寝転がっている。銀髪に浅黒い肌のメイド服の少女、ノエリアは編み物をしながらソファーに座っていた。

白髪に赤い瞳のシェールとリーシアはリビングに隣接しているキッチンに座り、全員が思い思いにくつろいでいるところだった。「一美ちゃんはいいいところの子ですからね。くれぐれも失礼のないようお願いしますよ」

祥子は穏やかな様子で言う。だが、なぜか威圧感を当一は感じた。祥子は、普通の主婦が発しているとは到底思えないようなプレッシャーを放つ事ができる。謎めいた主婦だ。

だが、なぜこの威圧感を祥子が放っているのは、当一には見当がつかなかった。

「うちでは躰がなっていないとか……いろいろ言われてしまうものですからね」

「……わかった……」

どういう事なのか、実は分かっていない当一であるが、とりあえずそう答える。

一美の家に行く日、シエール達は祥子に包みを渡された。

「それが必要になると思うわよ」

そう言っていた。

一美に渡すプレゼントか何かではないかという結論を付けシエール達は一美の家まで向かった。

一美の家の前に付いた全員は一樣に声を上げた。

「すごい大きい家ね」

シエールが言う。

「まあ、中に入れば普通の家だぞ」

右と左を見渡しても視界にずっと日本風の木で作られた垣根が広がっており、これは一美の家の垣根なのだという。

垣根の先を見てみると、背が高く、立派な瓦の屋根が長く続いていた。

みんなは興味深々のようなだが、何度もここにやってきている当一にとっては慣れたものである。

呼び鈴を押して当一が先頭に立って入っていった。

玄関に入ると、着物に着替えている一美が正座をしていた。

当一達の姿をみると、おもむろに三つ指についてお辞儀をはじめ

る。

「ようこそ我が家にいらつしゃいました。誠心誠意を込めておもてなしをさせていただきたいと思います」

当一はそれを見ると、初めて慌てだした。

「あの……一美？ この大げさな出迎えは一体何なんだ？」

何も答えずに、一美は続きを坦々と言い続ける。

「ごゆるりとしていただけるよう、つとめてまいりますので、よろしくおねがいします」

「あの……一美さん？ 一体どのようなおつもりなのですか？」

耐えきれず当一が聞くのだが、無視をしてしずしずとした物腰で立ち上がった。

「それではこちらにどうぞ」

そう言い、全員を家の奥にまで連れて行った。

一美が案内をしたのは、庭にある小さな建物であった。

わらぶきの屋根にしつくい壁。障子で丸く作られた窓がある。

入り口は低く、頭を下げて入ると、中には茶道具が一式そろえられており、今すぐにでも使えるように並べられてあった。

「茶室だろここ！ ぜんぜんゆっくりなんてできねえよ！」

当一は言う。

茶道とはいくつもの礼節や、堅苦しい手順などがいくつもある。

これに精通をした人間相手ならば、立派なもてなしであろう。

だが、何も知らずにやってきた、ただの女の子を、いきなり茶室につれてきてお茶をたてるなどというのは、嫌がらせ以外の何物でもない。

「当一……ちょっと……」

後ろから声をかけてきたリーシアが当一に耳打ちをした。

「これは、一美からシェールに対する挑戦なの……」

「どんな挑戦だよ……」

「男の子には理解できないと思うけど……」

リーシアが茶室の方を見る。今、茶室の中に入ろうとしているシエルだが、そこに一美が声をかけた。

「シエルさん敷居に足を置かないでください」

「え……？」

「敷居を踏むのは親の顔を踏むようなものですよ。くれぐれも注意をなさってくださいね」

「はい……ごめんなさい……」

わけも分らないまま怒られたシエル。よく見ると一美の口の端がニヤリと釣りあがっていた。

その様子を見ていたリーシアは、当一に言う。

「あんな感じよ……見えないところで起こる、女の戦いつてやつ……」

「陰険だな！ 一美のやつ」

「こんな感じでシエルの事をメツタ打ちにするつもりみたいね」
見えないところで行われる、マナー勝負という女の戦いであった。

中にはすでに一人の女の子がいた。

その女の子はシエルの姿を見ると三つ指について礼を見せる。

「はじめまして、私はオオルリと申します」

その女の子は顔を上げる。

黒髪に黒瞳。長身である一美とまったく同じくらいの身長だというのが座ったままの姿勢でも分かった。

顔立ちはおっとりとした感じであり、たれ目でやわらかい口元。

髪は一美のように長く伸ばしているが、一美とは様子が違うのが人目で分か風貌だ。

一美と同じく、着物を着ている姿から、この茶室の空間によく馴染んでいる様子だ。

入り口から次々と入ってきて、最後に入った当一は言う。

「一美。その子は誰なんだ？」

一美に聞くと、その女の子が答えた。

「はい、私の名前はスズと申します」

最初に名乗った名前と違う。シエールは言う。

「ちよつと待ちなさい！ あなた、最初は別の名前じゃなかった？」

「私の名前は生まれた瞬間から今に至るまでスズでございます。世界の始まりから、世界の終わりまで、スズ以外の何物でもなく、スズ以外にはなりえません」

「何なの？ その無茶苦茶な否定は！ どれだけあなたは自分はスズだって事を主張したいのよ！」

シエールがそう言うが一美がピタリと言ってそれを止めた。

「シエールさん。茶室の中で騒がないでください」

「う……う……」

納得のいかない感じのシエールは、イライラしているのが分かるギクシャクした歩き方で茶室の奥にある座布団に座った。

一美がそこでまた言う。

「そこは上座といって今日の場合であれば当一様の座る席です。あなたは三番目くらいにお座りください」

「そ……それは失礼したわね……」

齒をギリギリと軋ませたシエールは、三番目の座布団に座っていた。

「そういえば母さんが渡したものは一体何なんだ？」

一美に教えられて当一から順番に床の間に座っているところ、当一が聞き出した。

すでに一美の意図に気付いたシエールは一美の事を威嚇するようにして睨んでいるところだった。

シエールが包みを開けてみると。中には着物が入っていたのだ。

「この席にふさわしいお召し物ですねぜひお召しかえください」

また一美の口元が歪んだ。

着物の着付けは初心者には難しい。ここで、着替えられないシエールをなじるつもりなのだろう。

当一は、先行きが不安になりつつ、この先に何も起こらない事を祈った。

全員で茶室を出て一美の屋敷の一部屋を借りて、そこで着替えることになった。

実は、当一は何度も茶室で茶道を学んだことがあって一通りの事は覚えている。

当一は何度もやっている事なのですぐに着物に着替えることができる。

帯の結び方などは難しく、いきなりできるようなものではない。

「一美はすでに着替えているからいいとして……」

シェール達はどうだろうか？ 四人が全員で同じ部屋に入っているが、着物の着付けができる人間がいるとは思えない。

ふすまで区切られた隣の部屋。ふすまには綺麗な絵がかかれています、その上は彫刻のされた木で飾られていた。

床は畳でできており、南側には障子が張つてある。

シェール達がいる部屋の隣までやってきた当一は、部屋からリーシアが出てくるのを見つけた。

「よく結び方が分かったな」

当一が言つとリーシアが当一の事を見つける。

「先に一美に教えてもらっていたのよ」

リーシアはどうも一美と仲がいいらしいのは当一も知っていた。恐らくその事で教えてもらっていたのだろう。

「中の様子はどうなっている？」

「ノエリアには教えてあげたんだけど、シェールはガンコで、『自分でやる！』って言うて聞かないのよ」

なんとなく、聞いただけでその姿が想像できる。

「意地を張らなきゃいいのに……」

当一はそう言う。そこに中から声が聞こえた。

『やめなさい！ そんなところまで触る必要がありますか！』

『動かないでくださいまし！ ああ……またこれでは最初からでございますわ』

『最初からって！ なぜに全部脱ぐ必要があるのですか！ こら！ ブラまで脱がさないでください！』

声を聞くだけでも中で何が行われているか分かる……

「相変わらずね。あの二人」

あきれた様子でリーシアが言う。

そして、しばらくしてからラタとノエリアが部屋からできてきた。

「ひどいめにありました」

部屋を出て開口一番に言ったラタの言葉である。

着替えを終えて出てきたノエリアは、妙にツヤツヤした顔をしていた。

「後はシエールだけか」

当一は、ふすま越しに声をかけた。

「どうだ？ 結び方は分かったか？」

『うるさい！ こんなのにすぐに分かるわよ！』

リーシアの言うとおり、石頭のシエールは簡単に言うことを聞かないようだ。

「ところがなあ」

当一は言う。

「すぐ横で一美とスズさんが立っているんだよ。『まだなのですか？ はやくしていただいけませんか？』なんて感じでさっきからプレッシャーを受けまくっているんだ」

一美とスズの二人が立ちながらシエールの着替えが終わるのを待っていた。

「いえ、お待ちしていますので、あまり慌てずになさってください」

一美はそう言う。

「一美は言ってるけどな、なんか言い知れない威圧感があるんだよ。建前なのが丸分かりなんだよ」

シエールに向けて言う当一。

一美は、『いえいえそんな事ありませんよ』といった感じで首を横に振る一美だが、当一は怖くて目をあわせられなかった。

『うるさいわね！　ちよつと待っていなさいってば！』

「もついい！」

当一は、そう言つて部屋の中に入つていった。

『なにをいきなり入つてきてるのよ！』

『お前がモタモタしているからだ！』

部屋の中からそう声が聞こえ、それから、ドタバタともみ合うような声も聞こえ始める。

『いいか！　帯の締め方はな！』

『こら！　触るんじゃない！』

『お前もおとなしくしてろ！　ほら、襟が……』

『ヒイ！　馬鹿！　首元はやめろつて言っているじゃない！』

『めんどくさい！　おとなしくしている！』

中からそういった声が聞こえてくる。その最中、一美は一人で齒をかみ締めていた。

それを見たリーシアはさらなる大波乱が起こるのを予感した。

『これは、どうなつていくのかしら……』

シエールと一美から、それぞれ恐ろしいプレッシャーが発せられているのをリーシアは感じている。

だがここで怒つてしまえば一美の思う壺である事を本能的に分かつているシエールはすんでのところで怒りを押しとめていた。

当一は、この状況で頼れるのは自分だけであると感じているようで、何度もめくばせをかわしてきた。

ラタは、茶道に興味津々のようで、今お茶をたてているスズの動きを、獲物を狙うようにしてにらんでいた。こっちはどうやらあてにできそうにない。

「スズさん少し教えてもらつていいかしら？」

とりあえず、リーシアはスズと話をしてみる。どのような感じの

相手を調べてみる。それで、協力をしてくれそうならば、力を借りることにする。

そう思って声をかけてみたが返事がない。

「スズさん、お茶の立て方を教えてもらえるか？」

当一もスズに向けて聞いてみるが、まったく返事がなかった。リ

ーシアはためしに聞いてみる

「……オオルリさん？」

「はい、何でしょうか」

「やっぱりスズっていうのは偽名ですか！」

リーシアは言う。

「いや……違うんだ……」

それにフォローを入れるように一美が言い出す。

「茶の席では茶の席専用の名前が必要なんだ小説家のペンネームみたいにな」

一美が言う。

「はじめて知ったぞそんな話！」

当一が言った。

「当一は私から見ればまだ中級者だ。そんな事を教えられる段階じゃないな」

「あれ？ 本当なのか？ 俺が知らなかっただけなの？」

『もちろんだ』自信満々の様子で言う一美。だが、当一は知っている。

一美が自信満々の様子をしている時は、必ず何かの嘘をついている。おそらく、今回も一美の嘘だろう。

『だが、なんでそんな……』

いちいちそんな面倒な嘘をつくのだろうか？ 当一は考えるが、答えなど分かるはずもない。

あの話を聞いた後、シエールはやけに嬉しそうな顔をしていた。シエール（以下、シエ）なるほど……名前を考えるのね」

シエールが思案顔で言い出した。

シエ「リーシア。あなたはお茶の席ではランランと名乗りましょうね」

リーシア（以下、リ「やつぱりパンダつながりか！」

シエ「そして、スズさんの名前は『名前の分からないセニョール』でいいかしら？」

スズ（以下、ス「いいわけがないっす！ セニョールって何スか！」

当「（以下、当「スズさん、あんた一瞬地が見えたな。っす！
って言うキャラだったのか」

ス「う……そんな事あるわけないじゃけんですよ」

当「広島弁の、くじゃけん。のつもりか？ 明らかに使い方がおかしいぞ！」

ス「そんな事ないっちゃ！ うちが広島生まれの広島育ちだっちゃ！」

当「エセ仙台弁をしゃべりながら広島生まれを公言するな！」

シエ「では、スズさんの名前は『名前が分からなければ、生まれも分からないムツシュ』でいきましょうか」

ス「いいわけがないと言っているんだがや！ 何で変な名前しか付けようとしなんだがや！」

リ「私はランランよ！ 人間扱いされているだけマシだと思いなさい！」

ス「私だって、セニョールだのムツシュだのって呼ばれていて、女の子扱いされてないっす！」

シエールは人にあだ名を付ける事を趣味としている。

だが、つけるあだ名が必ずダサイ。皆から嫌がられているのだからそんな事はおかまいなしで、続ける。

シエールが顎に手を当てて考え始めた。一美の事をじって見つめる。

さすがの一美も、たまらずに身じろぎをした。どんな名前をつけるつもりなのだろうか？

当一の脳裏にいやな予感がよぎる。

シェ「お姑スーパ―RXね」

一美（以下）、一「お姑つてなんだ！変な名前を付けるな！」

シェ「その礼儀だの作法なのに対してうるさい所がまさにお姑よ！」
当「うわぁ……ドヤ顔だ」

上手いことを言ったつもりなのか？ それとも、一美に一つ何かを言い返せたのがうれしかったのか？ シェールは本気で満足そうな顔をしていた。

「やはりこれが一番手っ取り早いな」

一美が言う。

「ああいう陰險な方法の方があなたには似合っていたかもしれないわよ」

玉砂利の敷かれた屋敷の庭で、一美とシェールの二人は睨み合っていた。

一美は練習用のナギナタを持ち、シェールは竹刀を持つ。

「どうしてこうなるんだ？ いつの間にか決闘が始まっているんだが……」

当一はこの状況の意味がわかっておらず、そうつぶやく。

「たぶん本人達にしか分からないわよ」

リーシアはその隣で言う。

そして、そこで実況をするノエリア。

『始まりました！ 一美さんとシェールの戦い。女の意地をかけた頂上決戦です！』

どこからか持ってきたマイクを使って声を出すノエリア。その様子をシェールと一美の二人は面倒くさそうに見た。

「勝手に実況なんかを始めないでくれるか？」

一美が言うのにシェールも言う。

「ラタ。そいつを黙らせなさい」

シェールが言うのだがノエリアが続けて言う。

『勝者には当一様の熱い抱擁が賞品として送られます』

その一言で二人の雰囲気が変わった。

「ま……まあいいさ。好きにしゃべっておけ」

一美は、複雑な表情をしている。

「そうね……これくらいで集中力を乱しているんじゃないから、話にならないからね……」

シエールも似たような表情をしていた。

「別に、当一の事なんてどうでもいいのだが、勝負から逃げるわけにはいかないからな」

顔が小さくほころんでいる一美は、下心が完全に丸見えなのにもかかわらずそうやって弁明をする。彼女は口元が緩んだままだである。「そうよね。別に当一なんてどうでもいいんだけど、勝負には勝たないとね」

シエールも言い出す。

下心は完全に見え見えであった。

「さあ、どこからでもかかってきなさい！」

シェールの顔が緩んでいたのは一瞬の事である。すぐに、顔を引き締めた。

一美も、すぐに緩んでいた顔を戻す。シェールに言われるまま、軽くナギナタを突き出した。

「これで本気なの？」

様子見のための軽いジャブ程度の攻撃であるというのは、シェールも分かっている。

相手が懐に入ってくる攻撃を誘うため、さらに挑発をかけたのがさっきの言葉だ。

だが、一美は冷静で、軽くつつくような攻撃しかしてこない。

ナギナタと竹刀の長さの差による有利を理解した攻撃をしかけてきているのだ。

突然、シェールは体が動かなくなった。体中が壁にでも貼り付けられたようにして、ピタリと動かなくなる。

そこに一美のナギナタが眼前に迫った。

ギリギリのところで体の自由をとり戻り、シェールはすんでのところでおもいきり首を振って一美の攻撃をかわしたのだ。

リーシアが当一と隣り合ってシェールと一美の試合を見ている。

まずは、お互いに小手調べをしているようだ。リーチで勝った一美が小技をちくちく出していき、それをシェールがさばいていく戦い。

リーシアはそこに魔力の流れを感じた。

そして、シェールの影に向けて一本の針が差し込まれる。そしたら、シェールはピタリと動けなくなってしまった。

ディスプレイ

操作系の魔術の一種であると分かったリーシアは、解呪の魔法を使った。すぐにシェールは動けるようになる。

この戦いには思わぬところから邪魔が入っているようだ。

「ラタ。あなたはと思う？」

リーシアは、すぐ横で観戦をしているラタに聞く。これは横槍が入っている事を明かして、早々にこの戦いを止めるべきであろう。そう思っただけにラタに聞いたのだ。

ラタは何も答えなかった。

「聞きなさいよ」

ラタに向けてさらに声をかける。だがリーシアへの返事はない。リーシアはラタの肩を叩く。目の前で手を振ってみる。最後には頬をつねってみる。

まったく無反応だ。

「こんなにいっぱい……食べ切れませんよ」

そして、あまつさえこう言い出した。

「もしかして、あなた、寝てるの！」

目を開け、立ったままの姿勢のラタは、あたりを見回した。

そして、何かを思い出すようにして頭を抱えると、次に言い出したのがその言葉だ。

「寝てませんよ……」

「テンポが悪いのよ！ 立ったまま目を開けて寝る事ができるなんてどれだけ凄い能力を持つてるのよ！」

「寝てないと言っているのです」

あくまでも強情を張って寝てないと言い張るラタ。そこまで深く言及をするつもりもないリーシアは、話を元に戻した。

「それで、さっきのは見ていた？」

「はい。ものすごい大きなケーキでした。一人で食べてもいいというのですが、いくらなんでもあの量は一人では無理でしたね」

「夢の中の話はしていない！」

リーシアは、一美とシェールの戦いに視線を戻す。そしたら、クナイが飛んできてそれをよけるためにシェールが後ろに飛んでいるところだった。

「これは見たでしょう！ 止めるべきだと思うのだけど」

そしたら、また辺りを見回したラタは少し間を置いて答える。

「はい、寝ていません」

「また寝てたのあなた！ 少しは試合に集中しなさい！」

ラタは頼りにならないらしい。

ラタは、それから歩き出した。家屋の縁側にまで歩いていと、体を横たえて目を閉じた。

「結局寝るの！」

リーシアは、ラタから意見を聞くのをあきらめた。

『さあ！ 場外から投げ込まれる凶器の類をかわしながら戦う事を強制されたシェール選手。予測不可能の攻撃に防戦一方です！』

ノエリアがそうアナウンスをしているのを見つけたリーシアは、ノエリアに食って掛かった。

「あなたも！ なんでこの状況を受け入れているのよ！ 試合を止めなさい！」

シェールに向けて、ネットが投げられた。

動きを止めるためのネットだ。すんでのところでかわしたものの、これではもちそうにない。

「ああああああ！ もう！ こうするしかないわ！」

リーシアは、当一をつかみ上げた。

「ちょっと待て！ 俺が何をしたっていうんだ！」

リーシアにいきなりつかみ上げられた当一はそう言う。

リーシアはそれでさらに腹が立った。こいつは、この戦いの火種がどこか分かっていない。

「台風つてのはね中心は静かなものなのよね」

「返事になってないぞ！」

当一が言う事は無視をして、そのまま剣での押し合いをしているところの一美とシェールのところに投げつけた。

三人でもみ合って倒れこんだところにリーシアは重力魔法をかけた。

「こら！ 当一早くどけ！」

一美は言う。だが本気で嫌がっているようではなく、どさくさにまぎれて、手をつかんでいた。

『一美……意外とあざとい……』

一美の冷静なのかパニックっているのか分からない行動に、リーシアは心の中で呆れた。

「こら！ さつさとどかないとこつだから！」

シェールは、またどさくさにまぎれて、当一の頭に腕を回した。ヘッドロックに見せようとしているのだろうが、リーシアから見ても当一の頭を抱いているようにしか見えない。

当一は、それから逃れようとして、暴れているようだが、一美とシェールに押さえつけられ、リーシアの重力魔法で動きを封じられている。

どう見ても逃げられそうにない。

「さあ！ 早くどきなさい！」

シェールが言うのに合わせて一美も言う。

「そつだ！ はやく退くんだ！」

横から見ているだけでも奇妙な光景だ。押さえつけている二人が、口々に退くように言っている。

「もう！ そつやって反省をしておきなさい！」

『もう、どうにでもなれ』

リーシアはそう思い、この状況を完全に無視した。

その後、一美は満足げな感じで屋敷の案内を始めた。

絵に描いたような武家屋敷である和美の家は、いくつも絵や剥製などが飾られていた。家紋のようなものまで飾っており、それだけ

でも歴史のある旧家であるのが分かる。

当一の隣に、一美やシェールが立つと、争いの火種になるため、リーシアが当一の隣に立つて二人が寄り付かないようにしていた。

「なぜか、二人の機嫌がいきなり良くなったな……」

「なぜか…… っていうか、理由は明白なんだけどね」

リーシアが言う。

「俺の事をブン投げた理由も明白にしてみらおうか」

「当一が恨みがましく言うのにリーシアは口元をゆがめた。と、いうか、完全に切れた。」

「自分で気づかんか！」

リーシアがたまらずに大声で叫ぶと、ラタが周りを見回した。

「いえ…… 寝てませんよ」

「またあんた寝てたの！ 歩きながら寝るってどんな特技よ！」

シェールがそれを見て言った。

「あんた、騒ぐのはやめなさい。みつともないわよ」

それに続いて一美も言う。

「ギヤーギヤーと騒ぐのはやめろよ。野蛮だぞ」

「ついさっきまでチャンバラをやってた奴らに言われたくないわよ！」

シェールはため息を吐いた。

シェ「何をそんなに興奮しているのよ。そんなに熱くなるようなことがあった？」

リ「だから！ ついさっきまで、当一を取り合って試合をしていたじゃない！」

一「当一は関係ないぞ。あれはただの試合だ」

リ「あんたらこそ、どこまで落ち着いているのよ。さっきまで暴れてて、スツキリしているんじゃないの！ それって賢者モードって言うのよ！」

シェ「今暴れているのはあんたでしょう」

リ「うるさあああああい！」

一美の家の案内が終わった後、全員が家に帰るといつものように
プレッシャーを放っている祥子の姿があった。

「リーシアちゃん。いらっしやいな」

祥子の言葉に、体をふるえさせたリーシアはついていった。

そして、リビングに正座をさせられて説教が始まる。

「あなた、一美ちゃんの家に行って、騒ぎ出したり決闘を始めたり
したそうね」

「決闘はシエルと一美が……」

「オバサン達の間ではね。家の子の躰ができていないとなんだかん
だ言われてしまうんですよ。なんでもクナイやら取り網やらで庭を
目茶苦茶にしたとかいう話も聞くわ」

「それは私じゃ……」

「なら誰だっというの？」

「それは……誰なのかわからないですけど……」

いつの間にか、何もかもが自分のせいになされてしまっている。祥
子は、明らかにリーシアの事を疑っている目で、彼女の事を見た。

「違……違……」

泣きながらのリーシアは、自分の無罪を訴え続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9733r/>

茶室は本当はゆっくりするところです

2011年4月14日02時55分発行